



佐柳和男さんを偲んで

佐柳和男氏は昨年の3月より長い闘病生活を送られ、その間氏の高校、大学を通じてのご友人鈴木医師の親身のご助力も及ばず、1月9日午後7時42分、腎癌転移巣による肺癌のため昭和大学病院で召天されました。慎んでご冥福をお祈り申し上げます。

佐柳さんは昭和4年2月5日に東京でお生れになり、東京大学第二工学部を卒業後、キヤノン株式会社で新しい研究と開発の指導的役割を果たされ、昭和61年6月より(株)写研に乞われて入社されて以来、メディア研究所所長として先駆的な研究開発と所員の育成に情熱を傾けておられました。

昭和29年、東京大学（故久保田広教授研究室）を卒業され、キヤノン（株）に入社された頃は、光学の分野では情報理論の適用の問題が大きな研究テーマであり、また日本の光学工業が、とくにカメラの品質向上に向けて急ピッチな展開を始めた時期に当たります。その頃、私も故久保田教授の研究室にお世話になっており、佐柳さんのすぐれた分析力、アイデアに満ちた応用力そしてそれらを実現させる実行力などに深く感銘を受けましたことを、つい昨日のようにも想い出します。その時期には、研究上の討論あるいは共同研究などさせていただき、ますますそのお人柄に引きつづれられておりました。氏は、ご自分が苦労したようなことは一言も口にせず、常に前向きに、また得意であった声楽でバランスをとりながら、人には思いやり深く、そしてご自身はそのバイタリティーを遺憾なく発揮していました。昭和30年代には、ストックホルムの王立理工学研究所の故インゲルスタム教授の研究室で同門になり、海外での多くの共通の友人を持ったことなど想い出は尽きません。昭和40年代には、キヤノン（株）から米国のザイゴ（株）に出向されており、その折にも幾度かお会い致しましたが、実務的能力も発揮されるかたわら、ボストン大学の研究所のコンサルタントもなされ、幅の広い活躍をされていました。

応用物理学会では、いつも新風を起こすような研究発表をされており、とくに光学懇話会（現日本光学会の前身）の発展のため、画像工学コンファレンス、色彩工学コンファレンス等の設立とその充実に精力的に寄与されました。昭和50年代には、日本の光学界の成長からみて、国際的に貢献するためにも独立した光学会の設立が望ましいと考え、数名の同志で集まって何度も将来計画を議論しておりましたが、その中心人物の一人として適切なご意見やまとめ役をしていただきました。日本の光学会に対する佐柳さんの貢献は非常に大きなものであったと改めてお礼申し上げたいと思います。

常に走り続けられ、止まることなく、その行動力によって幅広いご業績を残された佐柳さんがお亡くなりなったことは、未だ信じられない気持です。どうか安らかにお休み下さい。

(早稲田大学理工学部、元日本光学会幹事長 大頭 仁)